（別記）

神埼市農業再生協議会水田フル活用ビジョン

1　地域の作物作付の現状、地域が抱える課題

本市では、米・麦・大豆を主体とする土地利用型農業が営まれており、米においては「おいしい米づくり」、「売れる米づくり」を目指し、麦・大豆については、作付けの団地化、生産の組織化等により収益性の高い生産体制確立を目指して取り組んでいる。また、農業経営の安定・発展を図るため、土地利用型農業に施設園芸を組み合わせた複合経営を中心に多様な農業経営が展開されている。

しかしながら、農業後継者不足や担い手の高齢化が進んでおり、農地の受け皿となる集落営農組織の安定した運営に向けて、法人化を推進し、組織の発展・強化に取り組む必要がある。

今後は、集落営農組織や法人、大規模担い手を核として、米・麦・大豆の安定した生産計画の検討、作業の効率化、生産費の低コスト化体制の確立、新たな担い手の育成・強化等による生産性の高い土地利用型農業の展開、麦作拡大、高収益野菜などによる水田の高度利用等の推進により、地域農業の振興を図る。

また、本市では、菱を使った特産品づくりに取り組んでおり、耕作者及び耕作面積の増加を図る。

2　作物ごとの取組方針等

（１）主食用米

本市における平成30年産の作付実績については、「コシヒカリ」が3ha、「さがびより」が26ha、「にこまる」が11ha、「ヒノヒカリ」が432ha、「夢しずく」が40ha、「天使の詩」が67ha、「さとじまん」が77ha、「ヒヨクモチ」が1,068ha、「ヒデコモチ」が16haとなっている。31年産以降についても、生産のめやすに即した作付けの推進を図っていく。

作付けにあたっては、麦と組み合わせた二毛作を推進しており、もち米を中心に据えた独自の産地づくりの展開に取り組んでいる。

今後は、さらに収量・品質の向上を目指した栽培指導を徹底するとともに、需要に応じた生産を基本に計画的な生産体制の確立を図り、魅力のある“売れる米づくり”を推進する。

（２）非主食用米

ア　飼料用米

市内では、現状11ha程の作付けが行われている。今後も引き続き、生産者と実需者の連携により安定した供給先の確保を行ったうえで、産地交付金を活用しながら、現在の団地化面積の維持拡大を図りつつ生産に取り組む。なお、収量の増加を図るために産地交付金を活用しながら多収品種での作付けを推進する。

イ　米粉用米

生産者と実需者の連携により、安定した供給先の確保を行ったうえで、産地交付金を活用しながら、現在の団地化面積の維持を図りつつ生産に取り組む。また、収量の増加を図るため、産地交付金を活用しながら多収品種での作付けを推進する。

ウ　WCS 用稲

生産者と実需者との連携により、安定した供給先の確保を行ったうえで、産地交付金を活用しながら、現在の団地化面積の維持拡大を図りつつ生産に取り組む。

なお、作付けにあたっては、大豆のブロックローテーションを妨げないようにする。

産地交付金を活用し、生産水田へ堆肥散布を行う資源循環の取組みに対し、耕畜連携助成により支援する。

エ　加工用米

市内では、現状 27ha 程の作付けが行われている。今後も引き続き生産者と実需者との連携により、安定した供給先の確保を行ったうえでの生産を推進する。

オ　備蓄米

大豆作付けが困難な地域の中心となる転作作物として、優先枠の範囲内で作付けを推進する。

（３）麦、大豆、飼料作物

麦については、水稲と組み合わせた二毛作作物として重要な地位を占めており、生産性・収益性の向上のため、土地基盤の整備、期間借地等による生産集積及び効率的な農業機械・施設の整備を積極的に推進していく。同時に、より一層の作付拡大を推進し、中長期にわたっての計画的生産、産地銘柄の確立を図ることにより、実需者ニーズに即した「売れる麦づくり」の展開を目指す。また、麦わらのすき込み等での有効活用により、コスト削減や生産性向上を図る取組に対し、産地交付金での支援を行う。

大豆については、転作の基幹作物として、集落単位でのブロックローテーションの実施や機械・施設の共同利用等により低コスト化や生産安定を図っている。今後は、産地交付金を活用しながら、ブロックローテーションによる団地化を非主食用米や飼料作物と併せて計画的に行い拡大を図る。さらに、産地交付金を活用し、不耕起播種技術の普及推進を図り、適期播種による安定生産を目指す。

飼料作物については、主に畜産農家の自家利用作物として取り組まれている。今後は、産地交付金を活用しながら団地化の取組を推進する。

上記作物について、二毛作の取組を行った場合には二毛作助成を行う。

（４）そば、なたね

実需者との契約に基づき計画的に作付けされているため、産地交付金の追加配分を活用し、作付面積や生産量等について現状を維持できるよう推進していく。

（５）高収益作物（野菜等）

野菜については、肥沃な土壌条件や冬温暖で日照に恵まれた気象条件を活かし、苺、茄子、アスパラガス、小ねぎ、ほうれん草、ピーマンを中心とした施設野菜やブロッコリー、玉葱を中心とした露地野菜等の産地を形成している。

今後の農業経営発展を図る中で野菜の占める役割は大きいものがあり、産地交付金を活用して新規作付けや規模拡大を積極的に支援するとともに、収量の増加と低コスト栽培に努め、高品質生産体制の確立を図る。

３　作物ごとの作付予定面積

作物	前年度の作付面積 (ha)	当年度の作付予定面積 (ha)	2020 年度の作付目標面積 (ha)
主食用米	1789.9	1779.8	1779.8
飼料用米	11.3	8.8	10.7
米粉用米	0.0	0.0	3.5
WCS 用稲	54.4	56.2	55.4
加工用米	27.2	21.4	23.0
備蓄米	2.9	0.0	0
麦	2,087.9	2322.5	2300.0
大豆	824.4	835.8	840.6
飼料作物	4.0	1.1	2.0
そば	0.0	0.0	0.5
その他地域振興作物	79.7	73.5	80.0
野菜	74.6	67.4	75.0
・花き・花木	4.8	5.5	4.7
・菱	0.3	0.6	0.3

4　課題解決に向けた取組及び目標

整理番号	対象作物	使途名	目標	前年度（実績）	目標値
1	・大豆 ・飼料作物 ・米粉用米 ・飼料用米 ・WCS 用稲 ・加工用米	大豆等の団地化に対する助成（基幹・二毛作）	団地化による大豆の単収の増加	(2018 年度) 175 kg	(2020 年度) 280 kg
			団地化による集積率	(2018 年度) 81.9%	(2020 年度) 86.7%
2･3	・麦	麦二毛作助成((残額)払分) 麦二毛作助成（通常払分）	麦二毛作取組面積	(2018 年度) 2049.4ha	(2020 年度) 2,300 ha
			水田利用率	(2018 年度) 168.7%	(2020 年度) (152.0%) 171.0.%
4	・大豆 ・飼料作物 ・米粉用米 ・飼料用米 ・WCS 用稲 ・加工用米 ・そば	二毛作助成（二毛作）	二毛作取組面積	(2018 年度) 12.2 ha	(2020 年度) 13.8 ha
5	・飼料作物 ・飼料用米 ・WCS 用稲	資源循環助成（耕畜連携） （耕畜連携・二毛作）	資源循環取組面積	(2018 年度) 36.1 ha	(2020 年度) 36.1 ha
6	・野菜 ・花き	園芸作物等（基幹・二毛作）	園芸作物の面積	(2018 年度) 76.7 ha	(2020 年度) (75.0 ha) 78.0 ha
7	・野菜 ・花き	園芸振興作物拡大（基幹）	園芸振興作物（新規・規模拡大分）増加面積	(2018 年度) 2.0 ha	(2020 年度) 3.0 ha
8	・菱	菱作付（基幹）	菱の作付面積	(2018 年度) 0.3 ha	(2020 年度) (0.25 ha) 0.5ha
9	・麦	麦わら有効活用（基幹・二毛作）	麦わら有効活用取組面積	(2018 年度) 1938.5 ha	(2020 年度) 2,000.7 ha
10	・大豆	大豆不耕起播種（基幹）	大豆不耕起播種取組面積	(2018 年度) 24.5 ha	(2020 年度) (16.6 ha) 26.0ha
11	・飼料用米 ・米粉用米	多収品種加算（基幹）	多収品種取組面積	(2018 年度) 10.8 ha	(2020 年度) 13.0 ha
12	・そば	そば作付助成（基幹）	そば作付面積	(2018 年度) 0.0 ha	(2020 年度)0.5 ha

※　必要に応じて、面積に加え、当該取組によって得られるコスト低減効果等についても目標設定して下さい。

※　目標期間は３年以内としてください。